様式 C-19

科学研究費補助金研究成果報告書

平成２３年　６月２０日現在

機関番号：２８００３
研究種目：基盤研究（C）
研究期間：2008～2010
課題番号：２０５９２６３７
研究課題名（和文）　野宿生活体験者の健康の意味に基づいたセルフケア行動を促進させるための看護援助
研究課題名（英文）　Nursing care to promote self-care behavior based on the health value of homeless life experiences
研究代表者
稲垣　絹代（INAGAKI KINUYO）
名桜大学・人間健康学部・教授
研究者番号：４０３０９６４６

研究成果の概要（和文）：
野宿生活者の支援団体の協力を得ながら、名古屋、大阪、沖縄で炊き出しの場や入所施設で継続した健康相談活動を行った。野宿生活体験者との信頼関係を築きながら、彼ら自身の意志を尊重した相談活動を行うことにより、彼らの健康意識を高め、健康を維持し、向上しようと考える機会となっていた。研究者たちも、彼らと共に存在することで、支援の在り方を考える機会となり、支援団体の様々な工夫を学ぶ機会となった。

研究成果の概要（英文）：
The health counseling that continued by Nagoya, Osaka, and Okinawa in the place and the be imprisoned facilities of the distribute the boiled rice while receiving the cooperation of the group that supported it to the sleeping in the open dweller acted.
It was a chance to think that their healthy consideration was improved by doing the consultation activity to which their own wills were esteemed while building mutual trust with those who experienced the sleeping in the open life, it stayed fit, and it was going to improve.
Researchers became the chance to consider what should be of support and chance to become, and to learn various devices of the support group because it existed with them, too.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
2008 年度	1,500,000	450,000	1,950,000
2009 年度	800,000	240,000	1,040,000
2010 年度	1,000,000	300,000	1,300,000
年度			
年度			
総　計	3,300,000	990000	4,290,000

研究分野：医歯薬学
科研費の分科・細目：看護学・地域・老年看護学
キーワード：野宿生活体験者・ヘルスプロモーション・主観的健康観・セルフアドボカシー・仲間づくり

１．研究開始当初の背景
ホームレス自立支援法が成立し、新たな制度が始まったにもかかわらず、多くの野宿生活者は、保険未加入や診療拒否により通院治療が困難な保健・医療問題(発展途上国並みの高度な結核罹患率)、入院治療における人権侵害（劣悪な病室、過剰治療等）などの医療機関利用に伴う問題、野宿生活による健康侵害と慢性的病気(高血圧、糖尿病などの生活習慣病)、劣悪な労働条件によるけがと後遺症、一

般薬品の不足などの身体・健康問題、野宿生活による慢性的不安・恐怖と将来への絶望感、自己喪失感など精神保健問題、公園・道路からの排除と施設収容を目指す福祉行政施策の問題点、支援団体の人的・経済的困難と行政と連携した NPO の問題点などが明らかになっている。今後は、利用者の多様なニーズと制度上の問題点を改善し、当事者・支援者・地域住民・行政による協力体制のあり方が課題であるが、野宿生活体験者自身の健康に関するセルフケア能力をたかめ、彼ら自身でできる健康管理を促進するための援助が求められている。

２．研究の目的

野宿生活体験者の身体的、心理的、社会的、文化的健康の査定を行い、野宿生活体験者に実際にかかわっている看護職の実践活動を検討することにより、「野宿生活体験者の健康の意味に基づいたセルフケア行動を促進させるための看護援助」を明らかにする。

３．研究の方法

野宿生活支援団体への調査、継続した健康相談活動における調査、米国への調査活動

４．研究成果

（1）野宿生活体験者の生活習慣（食行動、運動活動、睡眠、休養、アルコール、喫煙、保健行動など）や健康に対する意識や実態を把握するために、研究者で分担して、国内外の先行研究の文献検討を行った。米国の研究では、野宿生活者の健康問題は重大であり、無保険、公的扶助の欠落、ケアへのアクセスの少なさが主原因であるが、当事者の健康に対する認知が受動的であり、無気力感や失望感が強く、専門家の援助の意思が欠落希薄で、社会的支援の破綻が副原因として挙げられている。

（2）年末年始に、横浜、東京、名古屋、大阪で野宿生活者への支援活動をしている団体の健康相談に参加し、野宿生活者や元野宿生活の生活や健康実態を把握した。年末年始の時期に野外で生活せざるを得ない野宿生活者は多数存在し、薬の提供など援助の必要性は高かった。健康相談利用者の７割に循環器の症状があり、肥満やかくれ肥満が８割にある。生活習慣病の可能性が高く、健康状況は劣悪である。大阪の「炊き出しの場」で行われた健康生活相談に集まる人々は，血圧測定を希望する人が多かった。自分が高血圧であることを自覚していて測定に来る人が多く，健康への関心はあるように感じた。また，以前に降圧剤を飲んでいる人も数名おり（現在は中止している），「社会医療センターがはじまったら（年末年始は休業中）受診してみる」という人もいた。無料で受診できる医療機関があるか否かは，野宿者の健康への意識や保健行動に関係する。一方では，平常で最高血圧 200 ㎜ Hg 以上ある人もおり「それが通常だから」と特に医療機関に受診するなど考えない人もいたため，意識変革できるような支援の必要性を感じた。しかしながら，健康維持・改善につながる直接的な保健行動はとっていない人であっても，自分自身の体の状態には関心があることがわかった。

（3）2009 年 4 月に北九州自立支援センターを訪れ、野宿生活体験者で現在自立支援センターに入居し、今後自立していく女性に面接調査を行った。野宿生活の女性は、年々、日本においても増加傾向にあると言われている。Ｃさんは 50 代の女性である。高校卒業後事務系職場に就職。20 代で結婚後専業主婦となり、2 人の子どもに恵まれる。パチンコに通うようになったきっかけは不明であったが、パチンコにのめりこむようになり、離婚し子どもと離別した。さらには生活崩壊につながっていった。Ａ地区で野宿者となり現在自立支援センターに入居している。面会時のＣさんは、ギャンブル依存症は回復していたようだが、うつ傾向を呈しており表情が極めて乏しかった。貧困とアディクション問題、共依存、アダルトチルドレンなど、ホームレスに関連して複雑な問題を改めて認識できた。 相談機関や自助グループ等の社会的資源を理解し，アディクションを視野に入れた女性野宿生活者への支援を考えていかなければならない。

（4）大阪市の炊き出し公園で野宿生活者への健康相談活動に参加した編入看護学生にインタビューした

結果①未知の世界への関心 ②温かい交流③健康の偏り④路上での緊急の看護⑤厳しい生活と孤立の様相⑥助けあって生きる人々⑦不思議な現実⑧政治を動かす方法も必要⑨接して初めて分かること⑩看護職としての想いが語られた。

（5）沖縄県那覇市健康福祉部福祉政策課の自立支援相談員に面接し、那覇市のホームレスの現状と課題を調査した。2008 年 12 月で 127 人市内のホームレスを確認しており、平均年齢は 50 歳前後で、20 代も少数いる。県外から仕事を探して沖縄に来たものの、仕事に就くことができずホームレスになっている人もいる。また家族関係が途絶えているホームレスが多い。

（6）2009 年 11 月より毎月１回、路上生活者を対象として支援活動を継続している NPO の２つの施設の入所者を対象に血圧測定などの健康チェックや健康相談を行なってきた。また、公園でも、NPO の配食活動時に参加した。施設 A では９回、90 人、施設 B では、７回、115 人、公園では 11 回、150 人の健康チェックを行った。他の団体の公園での支援活

動にも２回参加し、120 人の健康チェックを行ない、支援活動のネットワークが広がった。公園巡回は、３つの公園を NPO の配食活動のスタッフと共に廻り、10 名ほどの路上生活者に面談し、希望者 4 人に血圧測定など行った。健康チェック時、異常があれば NPO のスタッフに連絡し継続的な支援を依頼した。路上生活経験者が入所する施設での健康相談活動は有効であり、公園での健康チェックも好評で、利用者も増加している。これらの活動を通じて、支援者とのネットワークが築かれ、ボランティア活度に参加する教員や学生も増加している。入所者自身の健康意識も向上し、毎月の健康相談を楽しみにしている入所者もおり、継続的に関わる事で、信頼関係も築くことができてきた。今後の課題として、継続的に活動に参加する人材の確保と、行政、医療施設などとの連携が必要である。

（7）沖縄県は路上生活者が他の都市に比べると少なく、支援も行政による大々的なものではなく、支援団体による小規模なものが主である。暖かい気候、沖縄県以外の出身者による移住（何とかなるという希望・理由）など特有の背景も存在する。2011 年 3 月 14 日に支援者 3 名を訪問し、聞き取り調査を行った。A さん：労働組合時代からの日雇い労働者や生活保護者、そして身体・精神障害者との豊かな経験が基盤にあり、それを NPO として制度化し、マンションの利用など工夫をされている。支援に対する確固とした理念と方針があり、それが利用者の限定につながることがあるにしろ、活動の根幹をなしている。特に、丸がかえしない姿勢に冷たさではなく、本人の主体性の尊重と活動の限界をふまえた上での支援のあり方が感じられた。支援は相談だけでは不十分であり、受け皿が必要であるという考えも実際的である。支援も就労支援から障害を抱えながらの生活と個人のニーズに対応して、柔軟に行っている。行政の丸投げ体質には批判も持ちながら、現実的な協力関係を維持しながら豊かな支援活動を継続している。ヘルパー事業への移行を目指されているとのことであるが、個人の経験、見識、行動力に負うところが大きく感じられ、それを伝達・移行していくことには困難が予想される。B さん：宗教的理念に基づき、貧しい人、困っている人には無条件で支援するところに特徴がある。ニーズのある人が増加するにしたがい、現時点での利用者を減らす方向ではなく、施設のキャパシティを増大させようとするところが宗教に基づく NPO らしさを感じる。その一方で自立に向けては利用者の希望やペースを尊重し、就労の機会の提供・紹介以外には特別に促進的な働きかけは行われていない。とにかく連絡があれば受け入れようとする姿勢は困窮者には心強い支援団体であろう。C さん：路上や刑務所での生活を体験した人たちが、同様の体験を経てきた「仲間」やスタッフのなかで自立を目指して生活を送っている。施設という受け皿と自立・就労に向けた支援、キリスト教に根ざした精神を基盤に、入所者がそれぞれの居場所を見つけながら生活を送っている。まとめ：3 つの施設は共通して、受け皿（生活場所）となり、仲間たちとの自立に向けた／自立した生活を支えていた。他の施設に比べて制限が少なく、さまざまなルートでさまざまな人たちが利用していた。みのりの会はマンションを利用しているためもあってか、就労・自立を目指す傾向が強く、一定の規則を守ることが求められていた。プロミスキーパーズと朝日のあたる家は宗教的背景に基づき、困窮している人は拒まず受け入れる姿勢が共通しており、自立への道も本人の意志やペースを重視していた。ホームレスが大都市に比べて少ないことや多くの支援を必要としている人々との共同生活のなかで、個々に支援をしている点が 3 施設の支援を特徴づけていると考えられる。

（8）米国ワシントン D.C.の退役軍人病院での調査では、患者はベトナム戦争に参加した退役軍人が多く、全国で 780 万人の患者の７割が、２万６千ドル以下の貧困層で、そのうち 11 万９千人がホームレスだとの報告があった。彼らは電子カルテを公共の図書館で見ることができるので、よく利用しているそうだ。でも治療継続が出来にくいので、年に４回ぐらいテレビで受診を呼び掛けたり、実際に多い地区へナースが出かけたりしている。

（9）米国で 40 年前から養成され活動しているナースプラクティショナー（NP）は、ホームレスの多い地区で治療活動を継続してきた。日本においても特定看護師が誕生した。特定看護師が路上生活者への健康を守る担い手として大いに期待できるということが米国での調査で明らかになった。

（10）継続した健康相談活動から以下のような成果が得られた。①相談活動が生活の場で行われること：炊き出しの場では、食事を目的に炊き出しに来た人がそこで支援者に出会い、自身の健康や生活について考えたり、時には変えたいという気持ちになる。健康を追求することをあきらめていたり、健康状態を知る機会の少ない野宿生活者にとって、日常の中に支援があることがそのきっかけになる。入所施設での健康相談では、さらに落ちついた環境で充分相談をする時間が確保されている。②支援が定期的・継続性であること：何度も足を運んで、健康状態や健康づくりの方法について語る野宿生活者が多い。その積み重ねによって、援助的関係が構築される。また、その人の語りを聴き、信念や価値観に沿いながら助言することを繰り返すことで、自分自身ができる方法を見出し獲得

していく。③自身が語ること：健康や生活を語ることが、自身を振り返る機会になる。語る中で、自分自身がどう変わりたいかに気づき、行動変容につながることもある。具体的な将来が見えない野宿生活者にとって、特に将来の自分の姿について語ることは重要な意味がある。④支援される関係から支援する関係へ：ホームレス生活者に支援をしている団体のメンバーの中に、元ホームレス体験者であり、支援する力を身につけながら自信を持って活動している姿が多くみられた。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔学会発表〕（計２件）

① 稲垣絹代、年末年始の路上生活者の健康実態と必要な援助，日本地域看護学会第１１回学術集会，2008，沖縄県
② 稲垣絹代：野宿生活者への健康相談活動に参加した編入看護学生の体験，日本地域看護学会第 12 回学術集会，2009，千葉県

６．研究組織
(1)研究代表者
稲垣　絹代（INAGAKI KINUYO）
名桜大学・人間健康学部・教授
研究者番号：40309646
(2)研究分担者
白井　裕子（SHIRAI HIROKO）
愛知医科大学・看護学部・助教
研究者番号：40351150
島田　友子（SHIMADA TOMOKO）
長崎県立大学・看護栄養学部・准教授
研究者番号：80196485
鹿嶌　達哉（KASHIMA TATSUYA）
広島国際大学・心理科学部・准教授
研究者番号：00284141
井上　清美（INOUE KIYOMI）
神戸常盤大学・保健科学部・講師
研究者番号：20511934